

第三回留学報告書

2015 年度 FOS 奨学生 福井真夫

1 授業

一年目の前半は、必修授業のほとんどの受講を免除してもらった。日本で一度、修士を経験していたため、二度同じ内容を習うのを避けたかったからだ。そのせいでクラスメイトの接点が少なかったのが心残りだったので、春学期はあえて必修の全てを受講してみることにした。英語が下手な僕にとって、一番話が弾むのは経済学についての会話だった。その甲斐もあって、大学に遅くまで残って一緒に宿題や研究について議論をする仲間も増え、充実した学期だった。ただ、必修授業の内容は日本で学んだことばかりだったので退屈なことも多かった。その分、二年目の授業を少し多めに履修して知的刺激を満たそうとした。為替や国際資本移動について学ぶ国際経済学と、健康保険や失業保険のあり方について学ぶ公共経済学を履修した。こうした二年目向けの授業はとにかく大量の既存研究を紹介し、何がまだ研究されていない穴なのかを学生に叩きこむスタイルを取る。日本で感じていた「自分の好きなことを研究しなさい」という雰囲気とは隔たりがある印象を受けた。

2 夏休み

MIT の経済学部的一年目の夏休みは、教授の RA（研究助手）をすることがほぼ通例になっている。僕もなし崩しに複数人の教授の RA をすることになり、学期中よりも遥かに忙しい夏休みを送っている。

「RA を通じて一流の研究に携われるので、多くを学べる」とまことしやかに言う学生もいるが、個人的には研究の手伝いをするのが役に立つとも思わない。実際は、労働力が欲しい教授と、教授と仲良くなりたい学生の両者のインセンティブが噛み合った徒弟制のようなシステムに映る。

3 モデル

経済学は、自然科学同様、数理モデルを重視する。しかし、そうしたモデルへの見方は経済学者によって大きく異なる。あるカンファレンスで、「今後のマクロ経済学はどうあるべきか」というテーマで激論が交わされていたのが印象的だった。「今の経済モデルは現実からは程遠い。現実のデータに近づけるための精緻化を進めなければならない。」と主張した登壇者がいた。すると「新しいものの見方を提供するのがモデルの役割だ。そのためにモデルは useful かつ simple であるべきだ」と会場から強い反対の声が上がった。

こうした溝は、あちこちで深い印象を受ける。確かに経済学のモデルは、物理学のような精緻な説明力を持たない。だが、だからと言ってモデルの統計的検証を放棄してしまっただけは科学ではないという反論ももっともである。そんなことを最近考えつつも、結局僕の中でも答えはよくわからないままだ。